

## サファヴィー朝前期の文人官僚アブディー・ベグとその著作 不動産目録編纂の意図

後藤 裕加子

### A Poetic Bureaucrat, 'Abdī Beg, and his Works: The Intention for Compiling the *Ṣarīḥ al-Milk*

GOTO, Yukako

The author of *Ṣarīḥ al-Milk*, Khvāja Zayn al-‘Ābidīn b. ‘Abd al-Mu‘min (d. 1580), known as ‘Abdī Beg, was a bureaucrat from a notable family of Shīrāz who worked in the royal chancellery of Shāh Ṭahmāsb and composed poetry and a history. Except for his few travels with Ṭahmāsb’s expeditions, ‘Abdī Beg was engaged in the administration of the capital court’s financial affairs. Among Ardabil documents, a decree issued by Ṭahmāsb in 973/1565 indicates that as a result of Ṭahmāsb’s active endowment of the shrine of Shaykh Ṣafi al-Dīn, administrative readjustments to previous and new financial documents were urgent, and despite never revealing his reluctance to be sent there, ‘Abdī Beg was appointed and dispatched to Ardabil for that project.

‘Abdī Beg’s three famous works were compiled to legitimize Safavid rule. In the preface of his earliest work, *Ḥannāt-i ‘Adn* (965–7/1557–60), which celebrated the royal buildings constructed by Ṭahmāsb in his new capital, Qazvin, ‘Abdī Beg glorified the rule of the Safavids, giving their religious authority, which derived from the genealogy of the Twelve Imams, greater weight than their secular authority. In the preface of the Safavid chronicle, *Takmilat al-Akhhār* (978/1571), written during Ṭahmāsb’s stable later reign, ‘Abdī Beg praised the Shah’s secular authority more magnificently, even though the priority of his religious authority was maintained. In the preface of *Ṣarīḥ al-Milk*, which was completed one year before *Takmilat al-Akhhār* (977/1570), he avoided splendid expressions of imperial authority, especially considering that the work was a register of the endowment documents of the sacred shrine complex. Displaying his literary talent, ‘Abdī Beg wrote suitable prefaces with prudent concern for the Safavid’s multiple types of authority. By including the preface and poems in the *Ṣarīḥ al-Milk*, he gave it literary value.

**Keywords:** ‘Abdī Beg, *Ḥannāt-i ‘Adn*, *Ṣarīḥ al-Milk* (inventory of real estate), *Takmilat al-Akhhār*, Safavid historiography

**キーワード:** アブディー・ベグ, 『エデンの園』, 不動産目録, 『歴史増補』, サファヴィー朝歴史叙述



はじめに

1. アブディー・ベグ・シーラージーの経歴
2. アブディー・ベグの著作
  - 2.1 詩の作品
  - 2.2 不動産目録
  - 2.3 『歴史増補』
3. 不動産目録編纂の意図

3.1 タフマースブの治世

3.2 タフマースブの宗教政策

3.3 歴史叙述にみるサファヴィー朝王権イデオロギーの変化

3.4 アブディー・ベグ諸作品の序にみるサファヴィー朝王権イデオロギー

おわりに

## はじめに

アブディー・ベグ版不動産目録の編纂者アブディー・ベグ・シーラージー (921/1515–988/1580–1) は、官僚として長年にわたりサファヴィー朝第2代シャー・タフマースブ1世 (在位 1524–76) (以下、タフマースブ) の宮廷に仕える傍ら、詩作を中心に著作活動を行った。アブディー・ベグ本人については詩人伝などに散見されるのみで非常に限られている。そのため、研究上焦点があてられるのはアブディー・ベグの個々の作品で、彼の経歴についてはアブディー・ベグの著作の刊本の編者ラヒモフやナヴァーイーによる解題にまとめられるにとどまる<sup>1)</sup>。『イスラーム百科事典』(EI) や『イラン百科事典』(EI<sup>r</sup>) の項目 [Dabirsiyāqi & Fragner 1982; Losensky 2008] や、アブディー・ベグの著作に関する各種の研究におけるアブディー・ベグ紹介の記述も、基本的にラヒモフにもとづいている。

アブディー・ベグ版不動産目録はサファヴィー朝の社会経済史研究の重要な史料であるが、その編纂は実務的理由以外にサファ

ヴィー朝の王権イデオロギーの変更に関わる宗教政策の一環としてとらえることが可能である。本稿はアブディー・ベグの経歴や著作について概観する過程でタフマースブ時代の政治情勢のなかにこれらの著作を位置づけ、さらに不動産目録が編纂された歴史的背景および編纂の意図を考察していく。

アブディー・ベグの執筆分野は本論集の研究対象である不動産目録のほか詩作や歴史書の執筆と多岐にわたるが、それぞれの分野でその叙述の分析が行われている [Ja'fariyān 1375Kh; Khafipour 2019; Losensky 2003; Rizvi 2011; Sulṭāni 2009; Trausch 2015]。これらの研究については本論のなかで適宜紹介していく。

## 1. アブディー・ベグ・シーラージーの経歴

まずは主にアブディー・ベグの著作と同時代史料の情報にもとづいてアブディー・ベグの経歴を紹介していく。

ハージャ・ザイン・アルアービディーン・アリー・アブディー・シーラージー Khvāja Zain al-‘Ābidīn ‘Alī b. ‘Abd al-Mu‘min ‘Abdī Shirāzī は、921年ラジャブ月9日/1515年8月19日におそらくタブリーズで

1) 旧ソ連で刊行された一連の詩集の編者ラヒモフは、アゼルバイジャン国立科学アカデミー所蔵のアブディー・ベグの著作の写本を原本として使用し、特に最初に刊行された *Majnūn* の序はアブディー・ベグの経歴については最も包括的で詳しい。 *Takmilat* の編者ナヴァーイーもアブディー・ベグの経歴についてラヒモフの記述を参照している。 *Āl-i Dā‘ūd* 1995 は、‘Abbās Zaryāb の遺稿を発表したもので、イラン所蔵の写本を用い、独自の情報もみられるが、一方で内容の検証が不十分で、錯綜が散見される。 *‘Abdī/Hidāyatī* の解説にも同様の問題がみられる。本稿はアブディー・ベグの経歴の再構成にあたっては、刊本からの本文引用や別の参考文献からの引用以外、基本的にラヒモフにもとづき、適宜別の解説の情報を追加していくこととする。

誕生した。アブディー‘Abdi (またはアブディー・ベグ‘Abdi Beg), もしくはナウィーディー Navidi の筆名で知られる<sup>2)</sup>。彼が仕えたタフマースブとは1歳違いの同世代である。シーラーズにルーツをもつ名家出身の財務官僚で、タフマースブの宮廷に入りし、詩人としても知られた文人官僚であった。タフマースブの弟サム・ミールザー (974/1566 没) が執筆した当代の詩人伝『サームの贈り物』の第3章(ワジールや官僚たち)では次のように伝えられている。

シーラーズの名家の出身である。敬虔さ、誠実さ、筆の正しさにおいて他に並ぶものはいなかった。しばらく気高き役所 (daftarkhāna) に仕える榮譽に浴した。実際、裁定の文書や個人々のひとつひとつの収支の額を詳しく審査した。[*Tuhfa*: 95]<sup>3)</sup>

アブディー・ベグはシーラーズのニスバで知られ、『サームの贈り物』にも「シーラーズの名家の出身」とあるが、これはアブディー・ベグ自身がシーラーズ出身であることを意味しない。サファヴィー朝にいたるまでのイスラーム世界史『歴史増補 *Takmilat al-Akhhār*』[*Takmilat*] のなかで、アブディー・ベグが自身の母方の祖父について次のように語っている。

(チャルディラーンの戦いの後) 当時サ

ファヴィー家の聖なる廟のワジールであった小生の母方の祖父ハージャ・ニザーム・アッディーン・ムハンマド・シーラーズ Khvāja Nizām al-Dīn Muḥammad b. Khvāja ‘Imād al-Dīn ‘Alī Shirāzī は、自身の家族の保護のためにアルダビールから統治の館タブリーズに来ていたが、捕虜となり連行された。息子たちは彼に身に何が起きたのかを知るために、従者にその足跡を追わせた。数年後、従者は何の知らせももたずに戻った。その能力と敬虔さなどで知られたシーア派の老人がどこに行っただのか、いかに身罷ったのかはわからぬままだった。[*Takmilat*: 55]

アブディー・ベグの著作に父方についての詳しい言及がほとんどない一方<sup>4)</sup>、シーラーズのニスバをもつ母方の祖父ニザーム・アッディーンについて詳しく言及している。このことはアブディー・ベグが母方の家系を誇り、また恐らく彼自身もそのニスバで認知されるようになったことを示唆する<sup>5)</sup>。これと関連してもうひとつ注目すべき点は、この祖父が「サファヴィー家の聖なる廟」、つまりサフィー廟のワジールを務めた人物であったことである。アブディー・ベグ版不動産目録では祖父の名前は確認できないが、サファヴィー家の始祖の廟の管理部門で実務の役職を担ったとなれば、官僚として高位にあるとともに、サファヴィー家や王朝の有力者とも

2) 本稿ではもっとも知られたアブディー・ベグで統一する。

3) サファヴィー朝の後期には、官庁(ディーワーン)は *dār al-inshā’* (文書庁) と *daftarkhāna* (財務庁) に分かれるが、サファヴィー朝の前期には職務による区分はまだ曖昧であった。ただアブディー・ベグ自身の記述やアッバース1世時代に書かれた詩人伝の「書簡の文体や簿記の学 (*shiva-i tarassul va ‘ilm-i siyāq*)」で知られた。叙述の仕事から解放されると詩作に向かった[*Iqlīm*: I 236], 「長年、役所で財務官やアワールジャの書記 (*sāl-hā-yi dirāz mustawfi va avārja-niwīs-i daftarkhāna būd*) であった」[*Ash’ār*: 353; *Takmilat*: *pīshguftār* 14; *‘Abdi/Hidāyatī*: 76] という記述からも、文書作成と財務の両方に関わる一方、より専門としたのは財務だったことがうかがえる。後世の詩人伝はアブディー・ベグをシーラーズ出身とするが、自身は著作のなかで出身については明らかにしていない。

4) 後述の『歴史増補』の引用以外に、*Āl-i Dā’ūd* によれば、詩集『ジャムシードの杯』(第2章参照)に、父を詠んだ詩がある[*Āl-i Dā’ūd* 1995: 123]。

5) *Āl-i Dā’ūd* によれば、アブディー・ベグの父親の名前は、*‘Abd al-Mu’min b. Ṣadr al-Dīn Muḥammad b. Naṣīr al-Dīn Aḥmad Qavāmī* である[*Āl-i Dā’ūd* 1995, 123]。

深い関係にあったことであろう。なおアブディー・ベグの祖父が920/1514年のオスマン軍の進軍の際にアルダビールから首都タブリーズに避難し、チャルディラーンの戦いの後で同市を占領したオスマン軍の捕虜となり行方不明となったのは、アブディー・ベグ誕生の1年前のことである。残された家族は首都にとどまり、アブディー・ベグは同地で誕生したと推測される。

アブディー・ベグ自身は937/1530-1年に16歳で宮廷に出仕した。

(938/1531-2年/卯年) Chūha Sulṭān (Takkalūのヘラート総督 Ḥusayn Khān Shāmlū<sup>6)</sup>による殺害)の出来事の後、Ḥusayn Khānはその妻で、‘Abd Allāh Khān Ustājālūのおぼであった Khān Khānumを自らの妻とした。先述の女性と親しかった小生の父は、Chūha Sulṭānの(出来事)の後で Ḥusayn Khān 家に関わるようになった。小生を教育し、マドラスアでの勤勉、神学生の交わり、Shaykh ‘Alī b. ‘Abd al-‘Alī (Karaki) のもとの修養から引き上げ、王子のワジールの職務のために宮廷の随員とさせた。父が急逝し、孤独のゆえにこの僕は Ḥusayn Khān やそのワジールたちのもとに留まることができなくなった。それゆえ役所 (daftarkhāna-i humāyūn) に入り、文書処理業務に従事するようになった (kitāb va juzva-dān bar tāq nihāda, ba daftar va awrāq pardākht)。このときからこの僕の名は会計の徒の列に連なることになった (dar siyāq-i arbāb-i ḥisāb dar āmad)。[Takmilat: 73]<sup>7)</sup>

サファヴィー朝の王子の近くに仕えるという千載一遇の機会をアブディー・ベグにもたらしたのは、キジルバシュの有力者 Ḥusayn Khān の妻を通じて、Ḥusayn Khān との関わりを得た彼の父であった。ただしこの幸運は長くは続かなかったようで、父の急死にともないアブディー・ベグは財務庁に勤めることになった。詳細は不明であるが、父の死によって Ḥusayn Khān との縁が切れたのか、父の後を継いで一家を経済的に支える必要が生じたなどの事情があったようである。アブディー・ベグは父については詳しく語らないが、母方の祖父のような高位にはつかなかったとしても、同じく財務に通じた官僚であったと思われる。

アブディー・ベグがマドラスアで就学中にシーア派ウラマーのカラキー (1533没) のもとで学んでいたことは [cf. Āl-i Dā‘ūd: 123-4]、さらなる注目点であるが、彼の教育と祖父の経歴については、不動産目録の編纂の背景に関わることなので、ここでは指摘するにとどめ、3.3 であらためて取り上げる。

アブディー・ベグの財務官僚としての職歴は、アブディー・ベグ自身が『歴史増補』に記載したものから断片的に伝わるのみである。二十歳頃の941/1535年にオスマン朝のスレイマン1世(在位1494-1566)の最初のアゼルバイジャン遠征のときに、対抗して行われたタフマースブのヴァンへの遠征への同行を記している [Takmilat: 80]。ヴァン遠征の以降の壮年期の出来事としては2人の息子の誕生(947/1540-1年の長男 Shams al-Dīn Muḥammad Mu‘min および957/1551-2年の次男 Jalāl a-Dīn Sulṭān Muḥammad)<sup>8)</sup>、961/1553-4年のグルジアへの旅行 [Majnūn:

6) タフマースブ即位後に起きた第一次内乱期の有力キジルバシュ・アミールの一人で、サーム・ミールザーの後見人。この頃はワキール、大アミールの地位にあった。1534-5年没 [Roemer 1986: 236-7; Newman 2006: 164; Takmilat: pishguftār 17-9]。

7) アブディー・ベグが仕えた王子の名前は明らかではないが、タフマースブの息子とすれば年代から975/1532年生まれの名長男ムハンマド・フダーバンダと考えられる。

8) Āl-i Dā‘ūdによれば、アブディー・ベグには3人の息子がおり、三男 Muḥammad Maṣīḥ は能書で知られ、その手による写本が現存する [Āl-i Dā‘ūd 1995: 123]。

V-VII] が詩から読み取れるのみである<sup>9)</sup>。次に『歴史増補』に記録があるのは晩年の転換期の出来事である。973/1566年(丑年)にヘラート総督 Muḥammad Khān Sharaf al-Dīn Takkalū の息子が反乱を起こしたときに、アブディー・ベグは反乱の平定後に勝利の書の草稿を作成し、文書長官 (munshī al-mamālik) とともにこれを進奏している [Takmilat, 124-5]。しかし同年(寅年)の5月にハーッサの徴税官の職を解かれ、アルダビールへ異動が決まった。この異動について、アブディー・ベグは『歴史増補』で詳細を説明することはせず、かわりに詩を詠みこんでいる。

シャッワール月20日の土曜日、この弱き僕はハーッサの税務官 (istifā-yi māli-i khāṣṣa-i sharifa) の職を解かれ、托鉢の旅 (darvīshī) が決められた。シャッワール月20日に私を官職から／時の巡りは気まぐれに解任した／もしその日を知りたくば／それは973年シャッワール月20日と知れ。[Takmilat: 127]

ときにタフマースブの遠征に同行することはあったものの、アブディー・ベグは基本的には首都の宮廷で堅実に官僚としての日々を送っていた。この詩は晩年になってからのアルダビールへの異動が彼にとって不本意なものであったことをうかがわせる。アブディー・ベグは同年の12月に当時の首都カズウィーンを出立し、アルダビールのサフィー廟に入り、翌年に遅れて家族も合流した [Takmilat: 127-8]。

アブディー・ベグは7年間サフィー廟の傍らに居住し、981/1573-4年に一旦カズウィー

ンに戻っている。2.2で後述するように、彼が委託された事業に目処がついたことが帰還の理由として考えられる。しかし988/1580年には再びアルダビールに戻り、まもなく同地で死去している [Majnūn: VII: Rawzat: pīshguftār 4; Takmilat: pīshguftār 21]。当時はタフマースブが死亡し、その後を継いだイスマーイール2世(在位1576-78)、ムハンマド・フダーバンダ(在位1578-88)の不安定な治世が続いていた時代である。かつて自身の祖父が戦禍を逃れて首都に逃れた時とは逆の進路を取ってアブディー・ベグがアルダビールに向かったのは、内乱が続く首都を避け、聖廟の傍らでの平安を求めていることだったのではないか。

## 2. アブディー・ベグの著作

### 2.1 詩の作品

この章では、アブディー・ベグの主要な著作の概要を紹介していく。

アブディー・ベグの著作は詩、不動産目録、歴史書の3つの分野に分けられるが、そのうちの不動産目録と歴史書は晩年のアルダビール時代に著わされている。アブディー・ベグはむしろ同時代人には詩人として知られ、彼が生涯にわたって著作活動を続けたのも詩作の分野である。『歴史増補』にも自身の既存の作品から引用したり [Majnūn: IX-X]、出来事に関連した自作の詩を詠み込んだりしている<sup>10)</sup>。アブディー・ベグの詠んだ詩の多くが散逸したなかで、作品の名が知られ、かつ一部が現存しているものは、ニザーミーの五部作に倣って創作された3つの五部作である。これらの五部作は各々がほぼ20代、30代、40代のときに詠まれている<sup>11)</sup>。

9) グルジアへの旅行は、タフマースブのグルジア遠征に同行したものであろう。

10) 例えば、第1章で紹介した973/1566年におこったヘラート総督の息子の反乱や、ワジール職にあった Mīr Sayyid Sharif Bāqī の死去など。

11) 20代のときの五部作は、『秘密の具現 *Mazhār al-Asrār*』(948/1541-2) [Mazhār]、『ジャムシードの杯 *Jām-i Jamshīdī*』(943/1537)、『マジュンーンとライラ *Majnūn wa Lailī*』(947/1540-1)、『七夕星 *Hafī Akhtar*』(946/1539-40) [Hafī]、『イスクンダルの鏡 *Āyin-i Iskandarī*』(950/1543-4) /

3つの五部作のうち全ての作品が現存し、また研究上重要視されるのが『エデンの園 *Jannat-i 'Adn*』である。この作品は、末年(966-7/1559年)にタブリーズからの遷都が完了した新都カズウィーンにタフマースブが建設した王宮地区サアーダトアーバードを詠う4100句からなる詩作群で、タフマースブからの委託を受けて2年半(965-7/1557-60)をかけて完成された [cf. *Rawzat*: 23]<sup>12)</sup>。史跡がほぼ現存しないサアーダトアーバードの様子や当時の政治史を伝える史料ともなっている<sup>13)</sup>。『エデンの園』はサアーダトアーバードの一年間を季節ごとに描写する。『清浄の園 *Rawzat al-Safā*』はサアーダトアーバード全体を描写し、春を詠んだ『花の大樹 *Dawḥat al-Azhār*』は、貴顕の居住地を含むジャアファルアーバード地区の構造を説明するとともに、アブディー・ベグの宮殿 (*dawlatkhāna*) でのシャーへの謁見が詠まれる [*Dawḥat*: 113-5]。夏を詠んだ『果樹園 *Jannat al-Athmār*』は王宮庭園内にある諸施設を描写し、秋を詠んだ『木の葉の飾り *Ḥaynat al-Aurāq*』は967/1559年秋にあったオスマン朝スレイマン1世の王子バヤズィト(1561没)の来訪とその死を詠み込み、冬を詠んだ『献身の書 *Ṣaḥīfat al-Ikhlāṣ*』は、967/1560年冬のグルジア王族イーサー・ハーン来訪とそのイスラーム改宗を詠んで終わる<sup>14)</sup>。

文学研究の立場から『エデンの園』五部作

の各詩集の詩を分析したローゼンスキーによれば、『エデンの園』は新しい宮殿や建築プロジェクトの建築者として王を讃えるという、建築や都市についてのアラブ詩やペルシア詩の伝統を踏襲し、タフマースブを賛辞した作品である。タフマースブは王朝の支配の永続性を象徴するとともに現世における行為者であり、宮殿は神の影である王の換喩として描写されているという [Losensky 2003: 4-5]。3.3で取り上げるように、サファヴィー朝の王権は主に宗教性と世俗性に分けられる複合的な要素から成り立っている。ローゼンスキーはアブディー・ベグの著作におけるサファヴィー朝王権の宗教性と世俗性の区分を明確化して分析することはなかったが、リズウィーはローゼンスキーの解釈に依拠しながらも、この二面性を指摘し、その統合をサファヴィー朝王権イデオロギーの特徴とした [Rizvi 2011: 77, 103-7]。

タブリーズからカズウィーンへの遷都は、タフマースブの治世が安定に向かう転換期を象徴する出来事であった。『花の大樹』の詩に詠まれたアブディー・ベグのタフマースブとの宮殿における謁見の描写は、タフマースブを讃えると同時に、アブディー・ベグのシャーとの関係の親密さが誇示されている。『エデンの園』の五部作は、王の側に仕える官僚、詩人として最盛期にあった壮年期のアブディー・ベグの代表作といえる。

12) [*Āyin*] (『ジャムシードの杯』以外は現存)。主に30代のときの五部作は、『人の本質 *Ḥawhar-i Fard*』(956/1549-50) [*Ḥawhar*]、『痛み の帳面 *Daftar-i Darā*』(956/1549-50以後)、『神秘主義者の天国 *Firdaws al-Ārifīn*』(961/1553-4)、『神の出現の光 *Anvār-i Tajallī*』(961/1553-4)、『神の国の宝庫 *Khazā'in-i Malakūt*』(968/1560-1) (現存するのは、『人の本質』のみ)。現存する作品はラヒモフにより刊行されている。

12) カズウィーンへの遷都については、3.1を参照。

13) 『エデンの園』を史料として用いた研究には、宮殿の絵画を研究した Ishrāqī [1977, 1982, 2010]、王宮地区の庭園の研究に利用した Sultānī [2009]、サファヴィー朝時代のカズウィーンないしは王宮地区の再構築に利用した Ishrāqī [1996, 2009, 2012]、Szuppe [1996]、Yarahmadi [2018]、後藤 [2018] がある。研究史については、Losensky [2003: 2] も参照。

14) *Rawzat*: 23-4にはアブディー・ベグ本人による『エデンの園』五部作の構成の説明がある。ラヒモフは『清浄の園』と『花の大樹』は個別、夏、秋、冬の三作は一冊にまとめている [*Athmār*]。『エデンの園』の五部作を一巻にまとめたテヘラン刊本 [*Adn*] もある。

## 2.2 不動産目録

詩以外の残る2分野の著作は、アブディー・ベグの晩年にアルダビールで著されたものである。アブディー・ベグは『歴史増補』ではアルダビールへの異動の理由について詳細を説明していない。しかし、不動産目録のなかでは、975/1567-8年にサフィー廟の管理人に Zahir al-Dīn Ibrāhīm Šafavī<sup>15)</sup> が任命された際に、管理部門 (sarkār) の整備とサフィー廟の寄進地・所有地の不動産目録の編纂が命じられたことが明らかにされている [‘Abdī I: 13b-15b; Fragner 1975: 198; Morton 1974: 34]<sup>16)</sup>。これがアブディー・ベグの著作の第2の分野に属し、本書の対象となるアブディー・ベグ版不動産目録である。977年シャッワール月1日/1570年3月9日に完成した [‘Abdī I: 170b]。

アブディー・ベグにアルダビールへの異動命令が出たのは、不動産目録の編纂命令に先立つ973年シャッワール月20日/1566年5月9日のことである。彼の異動の約7ヶ月前の日付(973年ラビー・アルアッワル月13日/1565年10月8日付)で、あらたにサフィー廟の管理人に任命された Sayyid Khān Aḥmad Beg Šafavī にむけたタフマースブの勅令が残っている。この勅令には、「ワクフ文書の原本 (vaqfiya-’i aṣl) にあった地名がワクフ文書から削除されているので、可能であればワクフ文書から削除されたのがどの土地であるか、誰がそれを行なったのかを調査し、結果を上奏すべきこと、文書 (sanad)

が存在していたり、入手された場合には世界の避難所たる宮廷に送付すべきこと」<sup>17)</sup>を元管理人のサーム・ミールザーが連絡してきたことや、「丑年のはじめ(973/1565)から恩恵の跡が授けられた監督のすべてのワクフ財について、ワクフの各対象の使用目的は何か、ワクフ設定者の規定はどうであったかを調査すべし」と命じられている [Fragner 1975: 180-3]。この勅令の実務担当として、アブディー・ベグはアルダビールに派遣された可能性が高い。

アブディー・ベグにワクフ文書調査・整理の責任者として白羽の矢が立ったのは、彼の財務官僚としての能力もあるだろうが、タフマースブと近い関係にあったことや、サフィー廟のワジールであったという彼の祖父の経歴も考慮されたものと思われる。ひるがえって不動産目録の編纂は、上述の勅令で指示されたワクフ文書の調査・整理の延長線上に構想された事業だったのではないだろうか。不動産目録編纂の歴史的な背景や意図については、第3節で考察していく。

## 2.3 『歴史増補』

アブディー・ベグの生涯最後の著作となった『歴史増補』は、彼の第3の著作分野に属する。

『歴史増補』はイスラーム世界史で、第3部がサファヴィー朝史と同時代地方王朝史の2部構成になっている<sup>18)</sup>。執筆開始は967/1559-60年と考えられている [‘Takmilat:

15) 歴代の管理人については、本論集近藤論文の本文および表を参照。

16) 不動産目録そのものの詳細については、「解題」を参照。

17) 引用の文章に続けて、具体的に Shamāsī 村の名とともに、その所有者の調査が指示されている。同村について、フラグナーは ‘Abdī I: 1a の欄外に記載があるとするが [Fragner 1975: 181], ‘Abdī I の落丁のために fol. 152 の後に紛れ込んだ4フォリオの fol. 1a を指していると思われる。

18) 『歴史増補』の写本は永らくマシュハドのマレク図書館 Kitābkhāna va Mūza-’i Milli-i Malik 所蔵写本 (3890 または 1393.04.03890/000) の1点と思われており [Navā’i: 30; 平野 2006: 63], Navā’i も校訂にあたっては同写本を利用している。Āl-i Dā’ūd は上記写本およびラヒモフが利用したアゼルバイジャン国立科学アカデミー所蔵の写本 (48) 以外に、イラン国内に議会図書館 Kitābkhāna-’i Majlis-i Shūrā-yi Islāmī の2写本 (10, 8401) とゴレスターン宮殿 Kākhi-i Gulistān 写本 (504) の存在を挙げている [Āl-i Dā’ūd 1995: 131-5]。ラヒモフは『歴史増補』の写本は4点あり、バクー、テヘラン、アフワーズにあるとするが所在などの詳細については記していない [Majnūn: XVI. ↗

pishguftār 30]。『歴史増補』本文のなかに、未年初め(978/1571)に執筆を終了したことが記されているので [Takmilat: 132], 不動産目録の編纂と並行して執筆されていたことになる。タフマースブの娘パリー・ハーン・ハヌム誕生(955/1548)の箇所での言及から [Takmilat: 99], 同王女に献上されたと思われる。

『歴史増補』刊本の編者ナヴァーイーは『歴史増補』とカーディー・アフマド・ガッファーリー・カズウィーニー Qāzī Aḥmad Ghaffārī Qazvinī<sup>19)</sup> の『世界を飾る歴史』との類似性を指摘し、ふたつの歴史書の記述を比較した上で、『世界を飾る歴史』の方が諸事件の日付や記述が正確であることから、アブディー・ベグが『世界を飾る歴史』に多く依拠したと結論づけている。ガッファーリーとアブディー・ベグは同時代に宮廷に出仕していた官僚としてお互いに見知っていた可能性が高く、『歴史増補』の執筆はガッファーリーがカズウィーンを去った後のことであるので、アブディー・ベグが何らかの理由でガッファーリーの写本を自書の執筆に融通したと推察される [Takmilat: pishguftār

23–30. Melville 2012: 212–3]。ただし、アブディー・ベグ自身が目撃した出来事、例えばグルジア遠征や『エデンの園』にも詠まれているオスマン朝の王子バヤズィトやグルジア王族イーサー・ハーンの来訪などには同時代史料として高い価値が認められている。

サファヴィー朝前期(16世紀)の歴史叙述を分析したトラウシュは、サファヴィー朝の歴史叙述にはティムール朝(1370–1507)のヘラート学派の伝統を受け継ぐ学派とカラ・コユンル朝やアク・コユンル朝の伝統を受け継ぐカズウィーン学派のふたつの学派があるとし、カズウィーン学派の歴史叙述を分析した [Trausch 2011: 352, 360. cf. Fragner 2021: 323]<sup>20)</sup>。アブディー・ベグとガッファーリーは後者に分類される。『歴史増補』は、カズウィーンに首都が置かれた時代の初期に年代記を執筆した歴史家たち(Qazvin I グループ)の歴史書に共通の特徴をもち、その歴史叙述はおおむね簡素で<sup>21)</sup>、また文中に挿入されている詩は全体に少なく、もっぱらサファヴィー朝の支配者の正統性に関連したものに限られる。特に詩人としての強い自覚をもつアブディー・ベグの

↗ Āl-i Dā'ūd 1995: 135]。いずれにしても平野が指摘するように、『歴史増補』刊本はマレク写本をさらに部分的に筆録したものを底本に利用した信頼度の低い刊本であるため、写本そのものの利用やあらたな刊本の校訂が求められる。

19) タフマースブおよび弟のサム・ミールザーに仕えた官僚、歴史家。イスラーム世界史の『世界を飾る歴史』(～972/1564–5)のほかにも同じくイスラーム世界史の『画室 Nigāristān』を著している。『サムムの贈り物』では、父親 Qāzī Muḥammad とともに第4章「詩人ではないが、ときに詩を詠んだ貴人たち」で紹介されている [Tuhfa: 120–1]。969/1561–2年にサム・ミールザーが投獄された後にメッカ巡礼に出立、そこからインドへ向かい、『世界を飾る歴史』を執筆後の975/1567–8年に死亡した。

20) トラウシュは16世紀の代表的な年代記作家として8人(Ibrāhīm Aminī Haravī, Ghiyāth al-Dīn Khvāndamīr, Yahyā b. 'Abd al-Laṭīf Qazvinī, Amīr Maḥmūd b. Khvāndamīr, Qāzī Aḥmad Ghaffārī, 'Abdī Beg, Būdāq Munshī Qazvinī, Ḥasan Beg Rūmlū)を取り上げ、その歴史叙述を比較分析する。このうちのIbrāhīm Aminī Haravī, Ghiyāth al-Dīn Khvāndamīr, Amīr Maḥmūd b. Khvāndamīr はヘラート学派を継承する歴史家、Yahyā b. 'Abd al-Laṭīf Qazvinī, ガッファーリーとアブディー・ベグの3名がQazvin I、彼らの後の世代のBūdāq Munshī Qazvinī と Ḥasan Beg Rūmlū はQazvin II に分類される。Melville はカズウィーン年代記作家を第二世代と位置づける [Melville 2012: 212–3]。サファヴィー朝の個々の年代記や歴史家についての詳細は、平野 [2006] および後藤 [2008] も参照。

21) 歴史的な出来事を言語的に確定することに自己限定するという、言語的ないしは歴史的なミニマリズムが特徴で、出来事や物語に対しては非体系的にアプローチし、過度に巧妙な言い回しや華美な言葉遣いを自制する傾向があるという [Trausch 2011: 352, 360]。



執筆した『歴史増補』に詩の引用が少ないことは注目に値するという [Tausch 2011: 363, 367–8; Melville 2012: 60]。ふたつの学派の特徴を統合し、「帝國的な見地 (imperial aspects)」を発展させた歴史叙述が確立されるのはアッバース 1 世の時代のことになる [Fragner 2021: 324]。

以上、アブディー・ベグの著作の 3 つの分野の概要を紹介してきた。随所でふれてきた各著作の特徴については、次節でさらに検討を加えていく。

### 3. 不動産目録編纂の意図

#### 3.1 タフマースブの治世

不動産目録の編纂の実務的な理由を挙げるとするならば、2.2 で紹介した 973/1565 年発行の文書に書かれているように、ワクフ文書の情報に混乱が生じるようになったため、原本の確認と情報の再整理が企画されたことがあろう。ワクフ文書の整理事業を提案したサーム・ミールザーは、管財人のほとんどが比較的短期で交替するなかで約 12 年 (1549–63) にわたって管財人職にあり、サフィー廟の運営をめぐる問題がある程度認知する機会があったと思われる。彼が管財人職にあった時代は、サフィー廟にさかんにワクフが設定されていた時代と一部重なる。タフマースブ時代は全時代を通じてサフィー廟にワクフが設定されているが、ワクフの設定が集中するのは 940 年代/1530 年代前半–40 年代前半で、それに次ぐ 950 年代/1540 年代前半–50 年代前半の倍の件数にもなり、これはタフマースブによってサフィー廟の整備が進められた時期にあたる<sup>22)</sup>。よってワクフ文書の整理事業

には、新旧のワクフ文書の統合という側面があったはずで、そこで文書整理の任務をタフマースブから命じられたのが、財務を専門とする官僚のアブディー・ベグだったと考えるのが自然である。

しかし文書を整理し、あらたに目録を作成するだけであれば、それは財務の業務範囲内であり、君主に目録を献呈するまでもないともいえる。しかしサフィー廟の不動産目録の編纂は、アブディー・ベグの言に従えば、975/1567–8 年のタフマースブの勅令によって決められた事業であった。現存する 3 写本のうち最も古いイラン国立図書館写本 3718 [‘*Abdi I*’] は、サファヴィー朝を賛美する序に金泥や赤・青・緑の色インクを用いた豪華写本で、献上を目的として作成されたものと考えられる (本論集渡部論文参照)。それではサフィー廟の不動産の豪華目録が作成された意図はどこにあったのか。この章では、王権イデオロギーの変化に関わるタフマースブの宗教政策が、目録編纂に繋がったことを明らかにしていく。これに先立ち、まずタフマースブの治世を概観していく。

タフマースブはサファヴィー朝の歴代シャーのなかでも最も長く、50 年を越えて君主の座にあった (930/1524–984/1576 年)。その統治時代は大きく分けるとタブリーズを首都とした前期 (930/1524–950/1544 年)、首都の移行期 (950/1544 年–965–6/1588 年)<sup>23)</sup> をはさみ、カズウィーンを首都とした後期 (965–6/1588–984/1576 年) の 3 期からなる。前期はさらに 930 年代/1520 年代前半–30 年代前半と 940 年代/1530 年代前半–40 年代前半の 2 期にわけることができる。

タフマースブは父イスマーイール 1 世の死

22) 詳しい分析は本論集守川論文を参照。

23) タブリーズからカズウィーンへの遷都については、後藤 [2018] を参照。後述するように、カズウィーン首都時代に執筆された年代記の多くはトルコ暦と呼ばれる春分始まりの太陰太陽暦にもとづく編年体となっており、カズウィーン王宮地区の建設の着工は辰年 (950–1/1544–5 年)、竣工は午年 (965–6/1588–9 年)。ヒジュラ暦や西暦では 2 年にまたがり、正確な年月日は年代記中の記述から確定できるものもあるが、確定できないものもある。

去後、10歳の若さで即位した。彼の治世の前期第1期は、若年で実質的な統治能力のない新たな君主の登場によってキジルバシュの有力部族間の勢力争いが起こり、またこれに乗じて東方ではウズベクの侵攻が続いた。内乱を収束させて国内は安定に導いたものの、第2期にはオスマン軍の侵攻が相次ぐようになった。

首都の移行期は国内外の騒乱が収束に向かった時代である。962/1555年にオスマン朝との間にアマシヤ条約が締結され、オスマン朝の侵攻に対する懸念が解消された。タフマースブは安全保障上の観点からオスマン朝との国境に近いタブリーズから内陸のカズウィーンへと徐々に首都機能を移していたが、午年(965-6/1558年)には王宮地区に新しい宮殿が完成し、カズウィーンへの遷都が完了した。王宮地区サアードトアーバードはアク・コユンル朝がタブリーズに建設した王宮地区サーヒブアーバードをモデルとして、宮殿を中心部にもつ王宮庭園に面して公共空間である広場が設けられ、周辺に経済施設である市場や宗教施設のモスクが整備された。カズウィーン王宮地区の建設は、サファヴィー朝のシャーによる初の本格的な都市整備事業であること、さらにその構造はアッバース1世がイスファハーンへ遷都した際に整備した王宮地区ナクシェ・ジャハーンに受け継がれるという点から、サファヴィー朝の王権を考える上で重要な出来事といえよう[後藤2018]。

カズウィーンへの遷都以降の治世後期、タフマースブはカズウィーンに定住し、国内の長距離移動をしなくなる一方、政治的には安定期に入る。

### 3.2 タフマースブの宗教政策

タフマースブの生涯にわたる宗教政策を概観した専論はないが、彼が徐々に宗教への帰依を強め、保守化していったことは指摘されている<sup>24)</sup>。その端緒は対外的な危機が相次いだ彼の治世前期にさかのぼることができる。

939/1533年の対ウズベク遠征のときに、タフマースブはマシュハドのレザー廟を参詣している。タフマースブの自伝によれば、このときにタフマースブはムハンマドが彼にイスラーム法に反する行為(*manāhi*)を避ければ勝利できる旨を告げる夢をみたという。翌晩の夢にはレザーが現れて違法行為を止めるようにタフマースブを説得した。この夢に従ってタフマースブは違法行為の禁止を告げる勅令を發布、この勅令は後に各地のモスクに刻まれた。同年にはカラキーに特権を授与する勅令を發布している[Tāzkira: 30; Arjomand 1988: 250-1; Arjomand 2016: 151; Khafipour 2019: 184; Rizvi 2000: 175]。941/1534年にオスマン軍が侵攻してきた時にタフマースブはおそらく初めてサフィー廟に参詣している。きっかけはやはり彼がみた夢で、アリーがサフィー廟に参詣して12の灯籠を寄贈すれば勝利できると告げたという。彼が灯籠を寄贈した後に、別の夢にサフィーがあらわれ、彼の勝利を予言した[Tāzkira: 37-8; Rizvi 2000: 164-6; Rizvi 2011: 76]<sup>25)</sup>。タフマースブが自伝に記述する神秘的な宗教体験と軍事的な勝利は、タフマースブが信仰心を高め、積極的な宗教保護政策を進める作用をもったであろう。この後もタフマースブは繰り返して違反行為を禁止する勅令を發布している[Newman 2006: 31-2]<sup>26)</sup>。

24) もともとティムール朝時代に文化の中心地として栄えたヘラートで成長したタフマースブは、芸術への造形が深く、アブディー・ベグラ詩人を支援し、絵画芸術には自らも画家に師事するほど強い関心をもったが、信仰への帰依が強くなるのと反比例して、絵画芸術への興味は失っていったとされる[Losensky 2003: 2; Newman 2006: 33-5; Canby 2005: 79-86]。

25) Rizviはサフィー廟のクルアーン朗唱者の館(Dār al-ḥuffāz)に刻まれた勅令はこのときに出されたものと推測している[Rizvi 2000: 164-6; Rizvi 2011: 95-8]。

26) Newmanはアマシヤ条約締結後の1555-6年、1556-7年、1563-4年、1571-2年にも勅令

3.1の冒頭でみたようにサフィー廟へのワクフ設定がもっとも多かったのも、タフマースブが神秘的な宗教体験を経て聖廟参詣を行った直後からの約20年の間のことなので、サフィー廟への支援がタフマースブの治世前期の宗教政策の一環として行われ、それが不動産目録編纂に繋がったと考えてよいだろう。

### 3.3 歴史叙述にみるサファヴィー朝王権イデオロギーの変化

サファヴィー朝はサファヴィー教団を母体とし、サファヴィー家を熱狂的に信奉するキジルバシュの軍事力によって世俗の支配権を獲得したが、イスマーイール1世は国家成立とともに十二イマーム派を国教とすることで、サファヴィー王権における神秘主義教団の要素を弱め、より普遍的な領域国家への転換をはかった。タフマースブの治世後期はその十二イマーム・シーア派擁護策の結果としてサファヴィー朝の宗教・政治イデオロギーが定着した時代とされている〔Khafipour 2019: 79–86〕。サファヴィー朝の王権を表象する有効な分野のひとつが文芸であり、その多くが官僚によってサファヴィー朝の支配の正統化を意図して書かれた歴史書も、その叙述に取り入れられた十二イマーム派的な要素が特に注目されてきた<sup>27)</sup>。

クインはサファヴィー朝の歴史書の序文や初期のサファヴィー神秘主義教団に関する記述を分析し、シャイフ・サフィー・アッ

ディーンの聖者伝に起源をもつ物語が、シャイフ・サフィーとその支持者たちが十二イマーム派のムスリムに見えるようにするために再生産され、著しく書き換えられたことを明らかにした〔Quinn 2000〕。メルヴィルはイスラームの歴史家が支配の正統化のために伝統的に系譜を利用してきたこと、サファヴィー朝の歴史叙述の特徴のひとつに系譜の強調を挙げた〔Melville 2012〕。サファヴィー朝の場合は早い段階でサファヴィー家の系譜をサイドの系譜、具体的には十二イマーム派の第7代ムーサー・アルカージムに結びつけるようになる。タフマースブも夢のお告げをうけた1533年に最初のシャイフ・サフィー聖者伝『純粹の精華 *Ṣafwat al-Ṣafā*』の系譜を含む序の改訂を命じている〔Melville 2012: 233–4; Rizvi 2011: 76; cf. Newman 2006: 30〕。この事実からもタフマースブの宗教政策推進の転換点が1533年にあったことは明らかであろう。メルヴィルによれば、サファヴィー朝の歴史書は基本的に同じ構造の系譜を採用しているが、トラウシュはさらに彼がヘラート学派に位置づける初期の歴史家 (Ibrāhīm Aminī Haravī と Ghiyāth al-Dīn Khvādamīr) による年代記と、カズウィーン学派の Qazvin I に分類する年代記の違いとして、サイドの称号の有無を挙げている<sup>28)</sup>。

サファヴィー朝の歴史叙述が本格化したのはタフマースブ時代とされるが〔Melville

↗ を発布していたことを紹介している。これらの勅令発布行為は信仰の保護者というシャーの優れたイメージ、宗教的正統性の強化を意図したものと考えられている。

27) ペルシア語歴史叙述研究全体の最新動向については、Quinn 2021 の Introduction を参照。

28) Melville はシャイフ・サフィー以前の祖先の名前の前にサイドの称号がつけられた最初の年代記を 'Abd al-Laṭīf Qazvīnī の『歴史概要』とする〔Melville 2012: 234〕。筆者が確認した限り、『歴史概要』の新版の刊本では、サイドの血統 (nasab-i siyādat) という表現は出てくるが、系譜の個人名にはサイドの称号は冠されていない〔Lubb II: 266, 268〕。旧版では8代前の Muḥammad 以前の祖先に全てサイドの称号がつけられている〔Lubb I: 238〕。なおサファヴィー朝年代記でアルダビールに慣用として冠される教導の都 (Dār al-Irshād) という形容詞は、恐らく『歴史概要』のイスマーイール1世の遺体の移送の場面ではじめて用いられており〔Lubb I: 237; Lubb II: 289〕、歴史叙述におけるサファヴィー王権の十二イマーム派の血統による宗教面での正統化がタフマースブ時代に進行したことは間違いないであろう。サファヴィー朝年代記内のサファヴィー家の系譜は Melville の当該ページを参照。

2012: 212], アブディー・ベグを含めてカズウィーン学派に属する歴史家たちによる歴史書の多くはタフマースブのカズウィーン遷都後に執筆されていることから、歴史叙述における十二イマーム派的要素の導入は、遷都後に本格化したと考えてよいだろう。アブディー・ベグの著作におけるタフマースブの治世に関する詩を分析したジャアファリヤーンは、タフマースブのサイドの血統が強調され、時のイマームや神の影と喩えられるタフマースブによるシーア派およびイスラーム法の普及や遵守が喧伝されていることを明らかにした [Ja'fariyān 1375Kh]。ハーフィーブールは、神学者ではないアブディー・ベグは支援者であるタフマースブの権威表明に関してシーア派の正統権威そのままではなく、ポピュリズム的な解釈を提示したという [Khafipour 2019: 184-5]<sup>29)</sup>。

これらの研究の成果を総括すると、タフマースブの宗教政策の推進と呼応し、タフマースブ時代の歴史書は十二イマーム派の血統を王権イデオロギーの主要要素として強調することで、サファヴィー朝による支配の正統性の強化を模索したといえる。第1節で紹介したようにアブディー・ベグは十代のときに十二イマーム派の法学者カラキーに学んでいた。国家思想となった十二イマーム派思想を教育過程で身につけた第一世代の官僚として、アブディー・ベグは十二イマームの末裔としてのサファヴィー家の賛美の文言を自然に紡ぎだすことができたサファヴィー朝の歴

史家の先駆者のひとりとなった<sup>30)</sup>。

しかしサファヴィー朝は、神秘主義教団や十二イマーム派の血統といった宗教的な要素以外にも王権のイデオロギーを見いだしていった。2.1で紹介したリズウィーはサファヴィー廟を構成する建築物を対象とし、サファヴィー朝の王権イデオロギーに宗教性と世俗性のふたつの側面があることを明確にするとともに、そのふたつの要素が統合されたところに特徴があるとした。タフマースブはサファヴィー廟の既存の施設に加えてあらたな施設を建設したが、これも宗教政策の転換点となったと考えられる1533年以後のことで、タフマースブが積極的に宗教保護政策を進めた時期にあたる<sup>31)</sup>。リズウィーはこの建設事業を単なる空間的な変更ではなく、スーフィー的な施設からシャーを中心とした施設への変化をもたらしたという点で思想面の変化とみなしている [Rizvi 2011: 79-86]。またリズウィーは不動産目録とアブディー・ベグの先行する作品である『エデンの園』の詩の建物の描写を比較分析し、前者の詩は後者の詩を再利用していること、ただしそれはタフマースブに直接関係する建築物に限られ、既存の古い建物の賛美には新しい詩をつくったと指摘する。そしてタフマースブが建設に携わった廟も宮殿も、王室儀礼の実施やシャーの正統な支配の確立のための建造物であり、アブディー・ベグの詩はタフマースブのシャーの権威を象徴する役割を果たしたと結論づける [Rizvi 2011: 116]。

29) Khafipourによれば、十二イマーム派にはマフディーのガイバ中の支配者の支配はすべて非合法であるという伝統的な考え方があり、サファヴィー朝の支配をいかに正統化するかは解決が困難な問題であったが、法学者 Muḥammad Bāqir Sabzavāri (1679 没) がマフディー不在時にもその恩恵は続くとしてこの問題を解決したことで、預言者の子孫であるイスマエールとサファヴィー家の人々は共同体を率いる合法的な後継者として捉えられるようになったという。

30) 例えばサファヴィー朝の初期の歴史家のうち、ヘラートでティムール朝に仕えたスンナ派の Ghiyāth al-Dīn Khvāndamīr は最終的にインドに移住し、Yahyā b. 'Abd al-Laṭīf はスンナ派信仰を理由に1555年に処刑されている [Melville 2012: 212]。

31) 二度目のサファヴィー廟訪問の後の1536年から1537年にかけて、タフマースブは廟に隣接する慈善施設の取り壊しと新たな建物の建設開始している。参籠の館 (Chillakhāna) の改修、ハディースの館 (Dār al-ḥadīth) と儀礼が挙行される集会場である楽園の館 (Jannatsarā) の建設が行われ、後者のためには住宅や商業施設、さらに4年後には庭園や果樹園を整備している。

リズウィーの考えでは、タフマースブはサファヴィー廟に新たな施設を建設することで、神秘主義的な要素にかわり、シャーの権威という世俗的な要素をあらたに取り入れたということになる。サファヴィー王権の両義性に関するリズウィーの示唆は重要ではあるが、その分析は詩の建物の描写に関わる部分に限られていることもあり、アブディー・ベグの叙述にみられるシャーの世俗的な権威については踏み込んで論じておらず、十二イマーム派の要素が考察対象から外れている点も不備といえる。

宗教的な要素への注目に比べると、サファヴィー王権の世俗的な要素について論じた研究は少ないため、王権の世俗性の観点からアブディー・ベグの叙述をサファヴィー朝期の叙述作品の流れのなかに位置づけることは難しい。しかしカズウィーン遷都は、十二イマーム派の血統の重視という宗教性に根ざした王権イデオロギーにあらたに世俗的な王権イデオロギーの要素を取り入れようとする試みの端緒ともなった。カズウィーンでは宮殿を舞台に古代ペルシア由来のノウルーズ（新年）などの宮廷儀礼や壮麗な即位式が確立され、これに呼応して歴史書や文書の年の記載に、イスラームの公的な暦であるヒジュラ暦にかわり、ノウルーズを元旦とする太陽暦のトルコ暦が導入された<sup>32)</sup>。発行年にトルコ暦が併記された現存最古の文書は966/1558年のもので、2.2で紹介したタフマースブの973/1565年の勅令も発行年に十二支年（丑年）が併記されている。カズウィーン学派の歴史家も編年の歴史叙述にトルコ暦を導入している。トルコ暦を優先する形式でヒジュラ暦を併用した最初の歴史書は『世界を飾る歴史』だが、アブディー・ベグの『歴史増補』は

トルコ暦を優先する形式を最初に採用した年代記であった。以後、サファヴィー朝のシャーに献上された歴史書は、一部の例外を除いてトルコ暦優先の叙述形式を採用していくようになる〔後藤 2008: 59, 64〕。

### 3.4 アブディー・ベグ諸作品の序にみるサファヴィー朝王権イデオロギー

3.3で述べたように、サファヴィー王権の両義性に関するリズウィーの分析はアブディー・ベグの詩における建物の描写に関わる部分に限られているので、宗教性と世俗性がいかに表象されているのかという点に注目しながら、『エデンの園』、不動産目録、『歴史補遺』の各作品の序を検証してみたい。

タフマースブが建設したばかりの王宮地区を描写するために著わされた『エデンの園』は、作品執筆の経緯と構成について説明する序 (dibācha) の後、王宮地区の描写に入る前に「イマームの美德」、「宗教の避難所たるシャー (shāh-i din-panāh) の支配への賛辞」<sup>33)</sup> が続き、サファヴィー朝の王権の宗教性と世俗性の両側面が描かれるも、記載順で十二イマーム派の血統がシャーとしての立場に優先されていることがうかがわれる。一方、時代が下ってタフマースブ治世の後期に執筆されたサファヴィー朝年代記の『歴史補遺』第3部では、明らかに世俗王権の要素が強調された書き方になっているが、宗教権威を越えることがないようにバランスがはかられている。例えば第3部の題名「十二イマーム派のサファヴィー家の至高の帝王たちについて (dar zikr-i pādshāhān-i 'ālī jāh-yi Ṣafaviya-'i imāmiya-'i ithnā 'ashara)」は、サファヴィー朝のシャーがイマームの後裔であることを前提としつつも、シャーがペルシアの帝王

32) モンゴル王朝のイルハーン朝時代に導入された東アジア起源の十二支はイルハーン朝の滅亡で表向きには一旦使用が途切れた。しかしサファヴィー朝時代までにはペルシアの伝統的な太陽暦と合わせて春分の日（ノウルーズ）が元旦となった。

33) 宗教の避難所たるシャーは、初期のサファヴィー朝年代記から使われているシャーの呼称のひとつで、イスマール、タフマースブに用いられる [cf. *Habib*: 440]。

であることを前面に打ち出している<sup>34)</sup>。サファヴィー家の系譜では十二イマーム派サイイドの血統を強調するが、系譜の冒頭のサファヴィー朝初代イスマーイールの名前の前には、偉大なる世界征服者たるハーン(Jahāngīr-khān-i kabīr), イスカンダルの王座のジャムシード(Jamshīd-i Iskandar-sarīr), 当代の最後のソロモン(Sulaymān-i ākhir-i zamān), 二星の合の皇帝(pādshāh-i šāhib-qirān)など、過去の偉大な君主に模したり、ペルシア語の歴史書のなかで世俗支配者に対して多用される称号を冠するなど、世俗の偉大な君主としての側面を同時に強調する工夫がみられる。また、セルジューク朝、ブワイフ朝、ガズナ朝、イルハーン朝といった諸王朝の名の後にサファヴィー朝の名を挙げ、イラン高原を支配した諸王朝の系譜にサファヴィー朝を位置付ける<sup>35)</sup>。そして、王朝の成立については「天国に住むシャーは世界を征服し、十二イマーム派のイマームらのフトバによって正義を唱え、彼らの真理と彼らの敵の誤りが確信された」と表現し、十二イマーム派のイマームの宗教権威がシャーの政治権力掌握に寄与したことが強調される[Takmilat: 34-5; cf. Rizvi 2011: 107]。

しかし『歴史補遺』とほぼ同時期に書かれた不動産目録の場合、序ではもっぱらサファヴィー家の十二イマーム派の血統や信仰の保護者としてのタフマースブが喧伝され、サファヴィー王権の世俗性を強調するような表現は抑制されている。'Abdī Iではシャーという単語自体の使用そのものが、色インクで書かれたシャー・イスマーイールおよびシャー・タフマースブという二人のシャーの名の一部と登場するのみで、過去の偉大な君主に模してのタフマースブへの賛辞はほぼ見

られない。不動産目録はサファヴィー家の祖廟へのワクフ寄進の目録であるため、ワクフ設定者としてのシャーの世俗性を強調することは、ワクフ寄進の対象となっている宗教権威としてのサファヴィー家始祖と寄進者との間の乖離を招き、叙述の仕方次第ではシャーを宗教権威への奉仕者であるかのような印象を残しかねない。そこでアブディー・ベグは不動産目録の序のなかではイマームの後裔としてのサファヴィー家の賛美に終始し、世俗権威としてのシャーの賛美については直接的な表現は避け、タフマースブによって建設された宗教施設群を詩で賛美するという間接的な方法を選択したのではないか。

タフマースブ治世の後期は政情が安定し、首都カズウィーンにシャーとしてのサファヴィー王権を強化する舞台としての王宮が建設され、そこで挙行される儀礼が確立した。王権を正統化する歴史書も多く執筆されるようになった。アブディー・ベグの『エデンの園』や『歴史増補』も王権を正統化する意図で執筆され、十二イマーム派の血統だけでなく、イラン高原の支配者としてのシャーの世俗権威があらたな王権イデオロギーの要素として強調されるようになった。一方、『歴史増補』と同時期に編纂されたアブディー・ベグ版不動産目録もサファヴィー王権の正統化を意図して編纂されたが、宗教権威としてのサファヴィー廟に寄進された不動産の目録という性格から、その序ではシャーの世俗権威の賛美は控えられ、十二イマーム派の血統の賛美に終始したのであろう。

34) シャーの世俗の権威を十二イマーム派の宗教権威と組み合わせた表現は『歴史概要』にすでに見られるが [cf. *Lubb II*: 266], ヘラート学派の年代記には見られない。このことからカズウィーン首都時代にシャーの権威強化の試みが始まったことを確認できる。

35) 先駆王朝を挙げる際には、セルジューク朝やイルハーン朝初代フラグはトルコと形容され (Turkān-i Saljuqī, Hülakū Khān-i Turk), サファヴィー家との違いが示唆される。

## おわりに

アブディー・ベグ版不動産目録の編纂はワックフ原本の確認と情報の再整理という実務の延長上に企画されたものであるが、勅令にもとづく編纂には『エデンの園』や『歴史補遺』と同様にサファヴィー王権を正統化する目的も付与された。アブディー・ベグ版不動産目録が単なる法務や財務のための目録としての存在を越えた価値を持ち得たとしたら、それはひとえにアブディー・ベグの文才に依るところが大きい。サファヴィー家は宗教的には神秘主義教団教祖の家系と十二イマームの後裔という側面、世俗的にはペルシアの支配者と遊牧系王朝の君主という側面をもち、王権イデオロギーにはそれらの要素が複雑に絡み合っていた。王権の賛美には、求められる作品の性格を的確に理解し、これらの要素のバランスを取ることが求められる。財務官僚であると同時に宮廷で名を馳せた文人であったアブディー・ベグは、配慮を凝らした賛美に満ちた序で、献呈書として編纂されたサファヴィー王家祖廟の不動産目録を飾り、その責務を果たしたのである。

## 参考文献

### ●史料●

アブディー・ベグの著作

- '*Abdi I*': 'Abdi Beg Shirāzī, *Ṣariḥ al-Milk*. Tehran, Mūza-'i Milli-i Īrān, Ms. 3718.  
 '*Abdi*/Hidāyatī: 'Abdi Beg Shirāzī. *Ṣariḥ al-Milk: Vaqfnāma-'i buq'a-'i Shaykh Ṣafī al-Dīn Ardabilī*. Ed. Maḥmūd Muḥammad Hidāyatī. Tehran: Sāzmān-i Awqāf va Umūr-i Khayriya, Mu'avinat-i Farhangī. 1390Kh/2011-12.  
 '*Adn*': 'Abdi Beg Shirāzī. *Jannāt-i 'Adn*. Ed. Iḥsān Ishrāqī and Mihrzād Parhizkāri. Tehran: Intishārāt-i Sukhan. 1395Kh.  
 '*Athmār*': 'Abdi Beg Shirāzī. *Jannat al-Athmār, Ṣaynat al-Awraq, Ṣahīfat al-Ikhlās*. Ed. Abū al-Faẓl Hāsim Ūghlū Raḥīmūf. Moscow. 1979.  
 '*Āyin*': 'Abdi Beg Shirāzī. *Āyin-i Iskandarī*. Ed. Abū al-Faẓl Hāsim Ūghlū Raḥīmūf. Moscow. 1977.  
 '*Dawḥat*': 'Abdi Beg Shirāzī. *Dawḥat al-Azhār*. Eds.

Abū al-Faẓl Hāsim Ūghlū Raḥīmūf & 'Alī Minā'ī Tabrizī. Moscow. 1974.

*Hafī*: 'Abdi Beg Shirāzī. *Hafī Akhtar*. Ed. Abū al-Faẓl Hāsim Ūghlū Raḥīmūf. Moscow. 1974.

*Ḥawḥar*: 'Abdi Beg Shirāzī. *Ḥawḥar-i Fard*. Ed. Abū al-Faẓl Hāsim Ūghlū Raḥīmūf. Moscow. 1979.

*Majnūn*: 'Abdi Beg Shirāzī. *Majnūn va Laili*. Ed. Abū al-Faẓl Hāsim Ūghlū Raḥīmūf. Moscow. 1967.

*Mazhār*: 'Abdi Beg Shirāzī. *Mazhār al-Asrār*. Ed. Abū al-Faẓl Hāsim Ūghlū Raḥīmūf. Moscow. 1986.

*Rawḥat*: 'Abdi Beg Shirāzī. *Rawḥat al-Ṣifāt*. Ed. Abū al-Faẓl Hāsim Ūghlū Raḥīmūf. Moscow. 1974.

*Takmilat*: 'Abdi Beg Shirāzī. *Takmilat al-Akhbār*. Ed. 'Abd al-Ḥusayn Navā'ī. Tehran: Nashr-i Nay. 1369Kh.

その他の史料

*Ash'ār*: Mīr Taqī al-Dīn Kāshānī. *Khulāṣat al-Ash'ār va Ḥubdat al-Afākār (Bakhsh-i Shirāz va Navāḥi-i Ān)*. Tehran: Mirāth-i Maktūb. 2013.

*Ḥabīb*: Ghīyāth al-Dīn Khvāndamīr. *Tārīkh-i Ḥabīb al-siyar fī akhbār-i afrād-i bashar*. Tehran: Intishārāt-i kitābforūshī-yi Khayyām. 1333Kh.

*Iqlīm*: Amin Aḥmad Rāzī. *Tazkīra-'i Hafī Iqlīm*. 3 vols. Ed. Muḥammad Rizā Ṭāhirī. Tehran: Surūsh. 1999.

*Lubb I*: Yahyā b. 'Abd al-Laṭīf Qazvinī, *Kitāb-i Lubb al-Tawārīkh*. Ed. Sayyid Jalāl al-Dīn Ṭīhrānī. (Tehran): Intishārāt-i Mu'asisih-i Khāvar. 1314Kh.

*Lubb II*: Yahyā b. 'Abd al-Laṭīf Qazvinī, *Lubb al-Tawārīkh*. Ed. Mīr Hāshim Muḥaddith. Tehran: Anjoman-i Āthār va Makhākhir-i Farhangī. 1386Kh.

*Tazkīra*: Shāh Ṭahmāsb b. Ismā'īl b. Ḥaidarī al-Ṣafavī. *Tadhkīra-yi Shāh Ṭahmāsb*. Ed. Amr Allāh Ṣafarī. Tehran: Intishārāt-i Shahraq. 1363Kh.

*Tuḥfa*: Sām Mirzā Ṣafavī. *Tazkīra-'i Tuḥfa-'i Sāmī*. Ed. Rukn al-Dīn Humāyūn-Farrukh. Tehran: Intishārāt-i Asāṭīr. 1384Kh.

### ●研究文献●

Abisaab, Rula Jurdi. 2012. "Karakī." *EIr*.

Āl-i Dā'ūd, 'Alī. 1995. "Niwishta-hā-yi Tārīkhī-i 'Abdi Beg Shirāzī." *Tahqīqāt-i Islāmī* 10(1): 121-143.

Arjomand, Said Amir. 1988. "Two Decrees of Shāh Ṭahmāsp concerning Statecraft and the Authority of Shaykh 'Alī Al-Karakī." *Authority and Political Culture in Shi'ism* (Said

- Amir Arjomand, ed.), 250–262, New York: State University of New York Press.
- Arjomand, Saïd Amir. 2016. “Three decrees of Shah Tahmasb on Clerical Authority and Public Law on Shi‘ite Iran.” *Sociology of Shi‘ite Islam: Collected Essays* (Saïd Amir Arjomand), 151–165, Leiden & Boston: Brill.
- Canby, Sheila R. 2005. *Persian Painting*. Morthampton: Interlink books.
- Dabīrsiyāqī, Muḥammad, and Bert Fragner. 1982. “‘Abdī Širāzī.” *EIr*.
- Fragner, Bert. 1975. “Das Ardabiler Heiligtum in den Urkunden.” *Wiener Zeitschrift für die Kunde des Morgenlandes* 67: 169–215.
- Fragner, Bert. 2021. “Consideration on Literary Aspects of Persian Historiography.” *A History of Persian Literature*, V (Bo Utas ed.), London & N.Y.: I.B. Tauris: 279–341.
- Ghereghlou, Kioumars. 2016. “Ġaffārī Qazvini, Aḥmad.” *EIr*.
- Ishrāqī, Iḥsān. 1977. “Naqqāshī-hā-yi kākhi Chihilsutūn-i Qazvīn va kāk-hā-yi digar-i Šafavī: az khilāl-i manzūma-‘i ‘Abdī Bik Shirāzī.” *Hunar va Mardum* 182: 2–9.
- Ishrāqī, Iḥsān (Echraghqi, Ehsan). 1982. “Description contemporaine des peintures murales disparues des palais de Shah Ṭahmāsp à Qazvīn.” *Art et société dans le monde iranien* (Chahryar Adle ed.), Paris: Editions Recherche sur les civilisations: 117–26.
- Ishrāqī, Iḥsān. 1996. “Le Dar al-Saltana de Qazvīn, deuxième capital des Safavides.” *Safavid Persia* (Charles Melville ed.), London and New York: I. B. Tauris: 105–116.
- Ishrāqī, Iḥsān. 2009. “Tawšif-i Dawlatkhāna wa Kākhi-hā wa Bāgh-hā-yi Šafavī dar Manzūma-hā-yi ‘Abdī Big Navidī, Shā‘ir-i Dawrān-i Shāh Ṭahmāsb-i Avval,” *Farhang* 68: 41–58.
- Ishrāqī, Iḥsān. 2010. “Tawšif-i Naqqāshī-hā-yi ‘Imārāt-i Dawlatkhāna-‘i Šafavī dar Ash‘ār-i ‘Abdī Big.” *Farhang* 71: 1–13.
- Ishrāqī, Iḥsān. 2012. “Shahr-i Tārikhi-i Qazvīn.” *Majalla-‘i Pazhūhish-hā-yi ‘Ulūm-i Tārikhi* 3(2): 1–16.
- Ja‘fariyān, Rasūl. 1375Kh. “Didgār-hā-yi Siyāsī-‘i ‘Abdī Beg Shirāzī (988 m.) dar bāra-‘i Shāh Ṭahmāsb Šafavī (984 m.),” *Hukūmat-i Islāmī* sāl 5(2): 240–251.
- Khafipour, Hani. 2019. “The Safavid Claim to Sovereignty according to a Court Bureaucrat.” *The Empires of the Near East and India: Source Studies of the Safavid, Ottoman and Mughal Literature Communities* (Hani Khafipour ed.), New York: Columbia Univ. Press: 179–192.
- Losensky, Paul E. 2003. “The Palaces of Praise and the Melons of Time: Ekphrastic Patterns in ‘Abdī Bayg’s Garden of Eden.” *Eurasian Studies* II. 1–29.
- Losensky, Paul E. 2008. “‘Abdī Shirāzī.” *EI<sup>3</sup>*.
- Melville, Charles. 2012. “The Historian at Work.” *A History of Persian Literature*, X (Charles Melville ed.), London & N. Y.: I.B. Tauris: 56–100.
- Mitchell, Colin P. 2009. “Ṭahmāsp I.” *EIr*.
- Morton, A. H. 1974. “The Ardabil Shrine in the Reign of Shāh Ṭahmāsp I.” *Iran* 12: 31–64.
- Newman, Andrew J. 2006. *Safavid Iran: Rebirth of a Persian Empire*. London & N. Y.: I.B. Tauris.
- Quinn, Shole. 2000. *Historical Writing during the Reign of Shah ‘Abbas: Ideology, Imitation and Legitimacy in Safavid Chronicles*. Salt Lake City: University of Utah Press.
- Quinn, Shole. 2021. *Persian Historiography across Empires: The Ottomans, Safavids, and Mughals*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Rizvi, Kishwar. 2000. “Transformations in Early Safavid Architecture: The Shrine of Shaykh Safī al-dīn Ishaq Ardabili in Iran (1501–1629).” PhD. dissertation, Massachusetts Institute of Technology.
- Rizvi, Kishwar. 2011. *The Safavid Dynastic Shrine: Architecture, Religion and Power in Early Modern Iran*. London & N. Y.: I.B. Tauris.
- Roemer, Hans Robert. 1986. “The Safavid Period.” *The Cambridge History of Iran*, VI (Peter Jackson & Laurence Lockhart eds.), 189–350, Cambridge: Cambridge University Press.
- Sulṭānī, Mahdī. 2009. “Bāgh-i Sa‘adat-ābād-i Qazvīn bar Asās-i Manzūma-hā-yi ‘Abdī Big Navidī Shirāzī.” *Gulistan-i Hunar* 11: 38–47.
- Szuppe, Maria. 1996. “Palais et jardin: le complexe royal des premiers Safavides à Qazvīn, milieu XVI – début XVII siècles.” *Res Orientales* VIII: 143–177.
- Trausch, Tilmann. 2015. *Formen Höfische Historiographie im 16. Jahrhundert: Geschichtsschreibung unter den frühen Safaviden: 1501–1578*. Wien: ÖAW.
- Yarahmadi, Samaneh, Ansari, Mohtaba & Mahdavinejad, Mohammadjavad. 2018. “Bāz-khwāni-yi Bāgh-i Sa‘adat-ābād-i Qazvīn: Bar asās-i Ash‘ār-i ‘Abdī Big Shirāzī va Inṭibāq bā Asnād-i digar-i Tārikhi (Re-Commentary of Sa‘adat Abad Garden of Qazvīn: A Comparative Analysis of



Abdi Beig Shirazi's poems and historical documents)", *Bagh-e Nazar* (The Scientific Journal of NAZAR research center for Art, Architecture & Urbanism) 58: 27-50.

後藤裕加子 2008 「サファヴィー朝年代記とトルコ暦（十二支）の導入」『東洋史研究』66(4): 50-82.

後藤裕加子 2018 「サファヴィー朝の「統治の都」における王宮地区建設事業——カズウィーンのスアーダトアーバードを事例として——」『関西学院史学』45: 80-49.

平野豊 2006 「シャー・タフマースプ1世時代のイラン史研究のための基本史料」『駿台史学』129: 53-81.